

多芸輪中

誌名	水利科学
ISSN	00394858
著者名	西脇,健治郎
発行元	水利科学研究所
巻/号	27巻1号
掲載ページ	p. 44-64
発行年月	1983年4月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



多芸輪中

—もう一つの水の文化史—

西脇 健治郎

1. 輪中——ところ変われば

試みに、養老の滝から、東麓はるか木曾三川流域を鳥瞰すると、㊸もっとも近く山裾に寄り添い、㊹一部を山中に食いこんで、断層崖下に展開するのが多芸（たぎ）輪中である。

これが、連り連って100ほどの大小輪中（水防・治水の共同体。または、その所在地名を冠して、多芸輪中・高須輪中などと、もっぱら地域名として呼ぶことが多い）が拡がっている。

それら輪中地帯に共通する大景観として、①沖積平野を大きく区切る巨大な輪中堤、②輪中堤や自然堤防の高みに集まる村々、③輪中堤から輪中堤への大鉄橋、④輪中堤の内側に見え隠れする排水機場の分布、⑤輪中堤上に一定の間隔で建てられている水防資材倉庫（郷倉）、⑥従来の堀田や池沼を埋め立てて造り直した格子状の乾田、⑦そこでの大農業機械の活躍、⑧ビニールハウスの大群などが、よく目立つが、そのすべてが水につきり、水と戦いつつ、長い間に低湿地に築き上げた地理的・歴史的な「一大文化財」ともいえよう。

しかし、輪中を水の入れ物として細かに見ると、輪中ごとのわずかの地理的条件の違いが、地域として、かなりの特異性を生み出すことにもなる。では、多芸輪中では、どのような条件がどのような多芸輪中らしい生活を展開させてきたのか。またそれがどのように未来にかかわっていくであろうか。

つぎに、項を追って多芸輪中を概観しつつ、「水と人のおつきあい」の特色をとらえて見よう。

2. 多芸輪中の概観

(1) 養老山麓を占める境域

多芸輪中規約によれば、つぎの町村がその区域とされている（注意：△＝一部の小字を除外、○＝堤脚外を除外、記号なし＝全村）。

養老郡：高田(△)・押越・烏江・沢田(△)・桜井(△)・上方(△)・五日市・竜泉寺

(△)・石畑(△)・ロヶ島・岩道・西岩道・大跡・飯之木・小倉(○)・鷲ノ巣・三郷・志津新田(○)・津屋(○)・志津(○)・根古地(○)・根古地新田(○)・大巻(○)・駒野新田(○)・釜段・大場・船村(○)・大野(○)・下笠・上之郷・栗笠(△)・橋爪(△)・乙坂(△)・多岐(△)

海津郡：城山村戸田・高須町福岡

ここに約1万2,000の人々が、水と仲良く生きている。毎日の暮らしの中で、水を恐れ、水と和し、水を活かし、水を大切にすることに、何かと心を遣っている。なぜそうなったのであろうか。輪中という地理や歴史のつくった「しあわせの入れもの」の仕組みを、しっかりと調べてみよう。

(2) 複雑な地勢の構造

多芸輪中は、さまざまな小輪中を、水に対応する高次の立場から複合した大型輪中であり、それが住民生活に深く関係している。まず特色的な地勢構造を、多面的に性格づけながら、その故にこそ、村々の暮らしや歴史が、どのように展開したかを調べてみよう。

(a) 扇端型輪中¹⁾

多芸輪中は養老扇状地の末端部に当り、前面の濃尾平野の基盤的な最大の沈下部分に、木曾三川が広く沖積を進めた。西濃第一の荒れ川である牧田川、大垣市域を貫く杭瀬川、養老山地が養う群小の支派川も加わったが広い埋め残し（大正期までの下池周辺）と、かすかに傾く池沼の多い低湿地をかかえてきた。

(b) 緩傾斜型輪中²⁾

堆積面が次第に木曾三川の大三角州に移行する巨大な氾濫原に、いくたびも自然堤防をくり抜けた。それら微高地には次第に人工堤防ができ、集落と畑地を伴った。ゆるい傾斜と窪みをもつことが、今のようないくつかの小輪中を複合させる基礎条件となった。

(c) 0 m以下を含む内陸輪中³⁾

深く内陸に位しながら、南部に地盤高マイナス50 cmの皿底状の低窪地がある。大正期に干拓された下池（しもいけ）の跡（約200 ha）であり、いま4つの排水機で排水し、みごとに乾田化されている。

(d) 複合型輪中⁴⁾

輪頂部には、養老山地の東麓飯之木（はんのき）から東方大跡に延びる微高地があり、昭和30年代まで南方1～2 kmの所に築かれていた人工の水除堤（みずよげづつみ）で、両村の集落と耕地を囲む、飯之木輪中があった。

これら上郷（上流部）輪中の水を受けて、湛水に苦しんだのが、南部の小輪中群（下流部、下郷）であり、両者の治水利水の利害を調整するため、相隣地関係にあ

る飯之木・下笠・岩道・有尾・大場新田・釜段・根古地・高柳の小輪中を複合したのが、多芸輪中である。

(e) 地下字型輪中⁵⁾

養老混合扇状地の末端部を占めるので、山麓の輪中地内にも地下水の湧泉（ガマ）が多い。これが掘抜井戸による水田灌漑や生活用水に広く利用されている。

古い株井戸制も、この輪中の地下水源の豊かさに発端があった。いま湧水の低温が禍となって、周辺の水田が休耕地となるケースが多い。

(f) 山寄り型輪中⁵⁾

気候との関連面からも、多芸輪中の地域性を「山寄り型輪中」としてとらえることができる。ここには夏の多雨性と雷雨性が目立つからで、輪中堤外の小倉谷は「雷の巣」とさえいわれてきた。

このように、濃尾平野の東高西低の地盤構造が、三大河とその生む地下水を、養老山麓に集めこむという、自然の仕組みを造り上げ、水の恐ろしさまでも集めて、ここを「水害の巣」としてきた。

3. くり返した水害

(1) 多芸輪中水害400年史

夏には海からの多湿な季節風や台風が中部の山岳地域に激突し、莫大な降水が木曾三川に溢れて乱流し、ときにはもっとも低い揖斐川筋を遡り、破堤・湛水の痛ましい災害をくり返した。

じつに、洪水が江戸期以来延べ500回を超え、年1.3回、大部分7・8・9の3ヵ月間に起こっている。記録的な情報を多芸輪中水害400年史にまとめてみよう(第1表参照)。

第1表 多芸輪中の主な水害と治水工事 (400年史)⁷⁾

西暦	年号	月日 (太陽暦)	水 害 ・ 工 事
1530	享禄 3	6. 27	洪水のため揖斐川が河道を変じ、現在の河道となる。 牧田川大洪水のため河状を変更（従来南岸は五日市・押越・島田、北岸は橋爪・高畑・大墳・南直江に至るまで一河道であったのが、この洪水で高畑から二派に分かれ、直江中瀬で再び合するようになる。新しく分かれたのが今の牧田川。現在の高田中学・美津濃工場辺は旧河川敷）。
1566	永禄 9	10. 14	
1618	元和 4	6. 23 ~7. 21	牧田川出水、島田は高畑村の境界堤14間切入り、耕地数町歩を荒す。
1650	慶安 3	9. 26	西濃の低地ことごとく水底に没し養老・岐阜間を舟で往来、関係

第1表 (つづき)

西暦	年号	月日 (太陽暦)	水 害 ・ 工 事
		~9. 27	地域で死者3,006人, 流失破壊家屋3,502戸。牧田川堤防数ヵ所破壊, この大水で神宮野ができたと伝える。牧田川堤国役普請。
1656	明暦 2	4. 6	津屋川出水河道を変更。小坪新田御堤16間築立。小倉古新田御堤創築388間。飯之木村御堤築立112間。鷺巣・大跡・飯之木・小倉 4ヵ村本田新田囲いのため新堤築立。 下笠・西岩道・ロヶ島・岩道・上之郷・大跡 6ヵ村込水御囲および押越村より落水御囲いのために, 新除堤新江堀工事 (押越の「あほよげ」はこの時できた)。
1691	元禄 4	4. 28 ~5. 27	津屋川沿い釜段新田で破堤入水。
1701	〃 14	9. 19	大雨のため牧田川・津屋川・金草川沿いの破壊多し。
1702	〃 15	—	各川の川面取払い。
1703	〃 16	—	牧田川・津屋川・揖斐川の堤改修築。
1708	宝永 5	—	揖斐川・牧田川出水, 高田西喰違および島田堤切入。
1714	正徳 4	—	牧田川水行直し。
1715	〃 5	6. 18	津屋川大水, 駒野新田にて破堤。
1720	享保 5	—	津屋川沿い志津新田堤切入。
1721	〃 6	7. 22	津屋川沿い徳田新田破堤。
		8. 10	牧田川沿い島田村・烏江村破堤。
1729	〃 14	—	牧田川・津屋川・色目川・伊尾川水行直し。
1731	〃 16	9. 12	牧田川・筋島田・金草川筋岩道・津屋川筋徳田新田切入。
1738	元文 3	7. 5	金草川大水, 岩道村入水。
1740	〃 5	8. 8	牧田川出水, 島田・烏江の堤破壊。
1752	宝暦 2	—	津屋川筋志津新田の堤切入。
1754	〃 4	8. 28	津屋川筋鷺巣堤切入。
1755	〃 5	—	宝暦治水工事完成。
1756	〃 6	10. 10	牧田川通り五日市村・島田村堤破壊。
1757	〃 7	6. 17	牧田川通り五日市津屋川筋徳田新田堤切入。
1766	明和 3	—	長州藩お手伝普請 (関係17町村)。
1768	〃 5	8. 12 ~9. 10	牧田川筋五日市村, 津屋川筋徳田新田破堤。
1773	安永 2	7. 22	津屋川筋志津新田, 金草川筋ロヶ島 堤 切 入, 駒野新田・小坪村・釜段堤防70間切入, 家屋12戸流失耕地数町歩を荒す。
		8. 9	島田村堤切れ, 烏江村切入, ロヶ島堤切入, 岩道村入水。
		8. 10	多芸輪中全域水入。
		8. 28	烏江湊堤より水押込む。栗笠輪中切入。

第1表 (つづき)

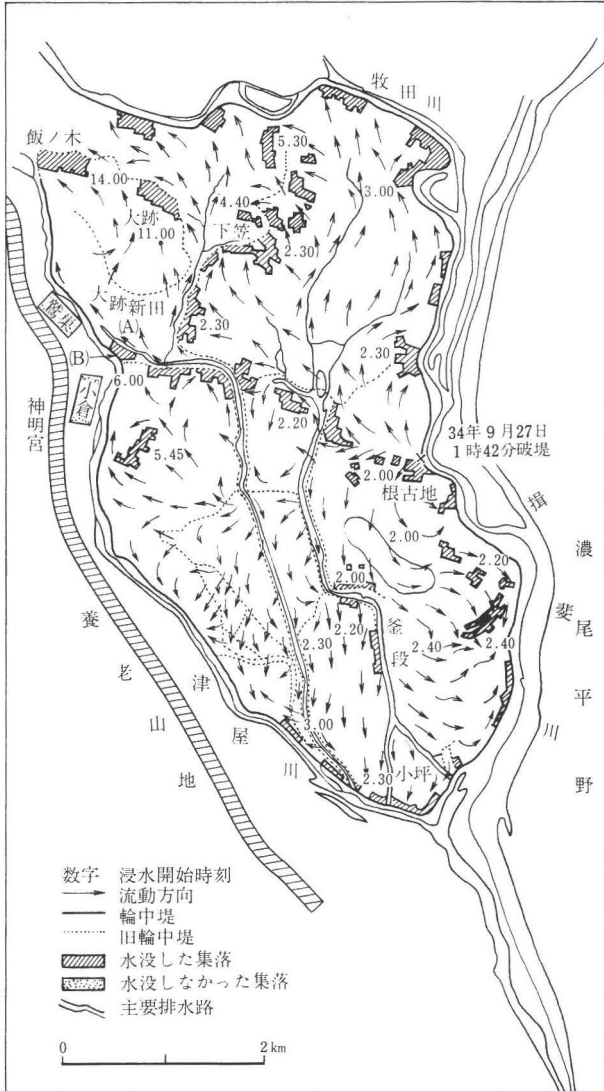
西暦	年号	月日 (太陽暦)	水 害 ・ 工 事
1778	安永 7	8. 3	津屋川筋鷺巣村・志津新田・小坪新田にて破堤。
		8. 14	金草川筋岩道村など入水。
1782	天明 2	8. 26	津屋川筋津屋村・志津新田入水。 揖斐川筋高柳新田110間破堤被害、下池輪中入水。 揖斐川・津屋川堤修理、水行直し (お手伝い普請)。 水行直し、各川各地にて54ヵ村実施 (お手伝い普請)。
1786 ~1788	天明 6 ~ 8		
1787	7	5. 9	志津新田・徳田新田・釜段新田に入水。
1788	〃 8	7. 3	徳田新田破堤、岩道村入水。
1789	寛政元	7. 9	津屋川筋小坪村破堤、同有尾村金草川筋岩道村等にて切入。
1790	〃 2	—	津屋川門扉造成。
1795	〃 7	10. 10	津屋川筋津屋新田垵樋吹抜30間ほど切入。
1797	〃 9	—	津屋川築堤 (お手伝い普請)。
1802	享和 2	8. 13	牧田川筋島田村と鳥江村破堤入水。 島田堤修築 (薩摩等 5 藩お手伝い)。
1803	〃 3	8. 14	津屋川筋大跡新田破堤。
1804	文化元	10. 2	大跡新田堤破壊。 — 大跡・舟付・根古地新田堤修築 (薩摩外 6 藩お手伝い)。
1809	〃 6	8. 20	牧田川筋五日市村破堤。
1815	〃 12	8. 3	金草川筋西岩道村切入、牧田川筋島田村切入。
1816	〃 13	8. 26	津屋川筋破堤釜段村・同新田入水、根古地村堤修築。
1820	文政 2	8. 2	長州藩お手伝い普請 (第 2 回目)。
1835	天保 6	—	牧田川州浚。
1837	〃 8	—	大暴風雨大牧村等で垵樋吹切。 高柳新田堤50間破堤、岩道村入水。
1850	嘉永 3	9. 13	大暴風雨大牧村大牧新田で84間破堤、流出家屋33戸。 大跡新田破堤。
1855	安政 2	9. 30	駒野新田と大場新田と釜段新田で破堤入水。
1857	〃 4	7. 21	津屋川筋鷺巣村破堤。
		11. 5	津屋川筋大跡新田・釜段新田・小坪新田・志津新田・徳田新田 など堤切入る。
1860	万延元	6. 29	木曾三川大洪水、被害甚大。牧田川筋舟付堤・同鷺巣堤等切入り、多芸輪水全域入水。湛水深岩道村で鴨居上程度。一般にこの水害を「舟付切れ」と呼称。
1870	明治 3	10. 2	牧田川筋 7 ヲ所 (395間)・押越村 8 ヲ所 (140間) 切入る。島田

第1表 (つづき)

西暦	年号	月日 (太陽暦)	水 害 ・ 工 事
1881	明治14	9. 12	村破堤。 牧田川筋の大跡新田・津屋川筋の徳田新田切入る。島田村で切入6ヵ所、1戸流出。
1884	〃 17	7. 16	牧田川・金草川大增水。大牧新田破堤、徳田新田・大跡新田入水。
1885	〃 18	7. 1	暴風雨で揖斐川・牧田川・津屋川・金草川とも大增水、広く水入。県下で決壊622ヵ所・死亡6人・家屋流出235戸。大跡新田・大牧新田で切入。
1896	〃 29	7. 20	豪雨で木曾・長良・揖斐・牧田・金草諸川に濁流みなぎり、堤防が各地97ヵ所決壊。全多芸郡では床上浸水854戸・流出家屋3戸・崩壊266戸・耕地浸水2,080町歩に及ぶ。
		9. 8	豪雨襲来。3日目の暴風も加わり、ことに西濃に水害激甚。多芸郡内で堤防決壊58ヵ所・床上浸水978戸・流出家屋65戸・崩壊1,571戸。耕地浸水3,214町歩の大被害を受ける。
1898	明治31	—	木曾・長良・揖斐三川分流工事着手。
1903	〃 36	—	三川分流工事竣工。
1933	昭和8	—	県営牧田川改修工事施工。
1952	〃 27	—	国営牧田川・杭瀬川分流工事完成。
1953	〃 28	—	13号台風による被害復旧工事施工(国営)。
1959	〃 34	8. 12 ~8. 14	台風7号による集中豪雨を受け根古地地内で輪中堤200m決壊。家屋の流失、土砂の流入、水田の埋没など多く、悲惨を極めた。町内で、負傷者3人、全壊家屋33戸、流失家屋17戸、半壊家屋1,538戸、水田埋没70町歩。
1959	〃 34	9. 25 ~9. 27	惨禍の規模史上最大級。再び根古地の仮堤が決壊し、全多芸輪中が水没。町の調べによると、全壊家屋33戸、流失家屋8戸、半壊家屋1,445戸、水田の埋没42町歩に及ぶ。経緯は本文参照。
1971	〃 46	8. 31	烏江で牧田川と杭瀬川との中堤破壊。
1972	〃 47	9. 16	烏江で昨年同様牧田川と杭瀬川の中堤で2ヵ所破堤。
1976	〃 51	9. 11	牧田川大出水のため、根古地と江の橋の中間で、輪中堤500mにわたり法崩れ発生。水防団出動し、さいわいに決壊をまぬがれた。

(資料) 主として岐阜地方気象台編「岐阜県災異誌」養老町史通史編による。

第1図 伊勢湾台風による多芸輪中の洪水⁸⁾



(注) (A)の地点は明治中期に消滅した大跡新田。(B)は現存する神明宮の位置(矢印の先端あたりにある)。
 (資料) 建設省地理調査所の資料による(一部西脇加筆)。

(2) そのモデル、伊勢湾台風の記事

多芸輪中が、伊勢湾台風で一夏に2回も深い泥海に化した水の恐怖。昭和34年8月12日。揖斐川・牧田川が上流地方の集中豪雨を受けて、空前の大増水をした。ついに多芸輪中の輪中堤が、根古地（ねこじ）地内の曲り角近くで、約200mにわたって決壊した。十数戸の民家を流失し、どの排水機も完全に水没して機能を失い、牧田川筋から養老山麓までを一大泥海と化した。

村人たちは養老山麓に近い公設の緊急避難所に集団避難した。一部は残存した輪中堤に仮設した仮小屋に起居した。仏壇や重要物品を村内の高屋敷の家に預け、牛などの家畜は養老山麓の農家に委託した。

ただちに破堤個所の復旧工事を続行。避難小屋の並ぶ牧田川沿いの輪中本堤を、ダンプが夜を日についで走った。40日ほどで約80%を築堤したその仮堤が、9月27日再び上流地域の集中豪雨（伊勢湾台風）を受けて、切れこみ、またまた湛水を続けた。前回と比べて湛水面は約60cmは低かったが、長期の水没で稲作は全滅。最低部の下池干拓地では湛水4ヵ月に及んだ。牧田川筋の村々に赤痢が広がった。

その後、脅え切った住民は、3日も雨が續くと、応急の「水がたつけ」（輪中で水害に際して重い財物を高所に移す避難体制をとること）をする。従来から数年に1回は厳しく励行したし、家畜や重機具の預け先についてもつねに計画をもっていた。今ではほとんどの家に、仏壇を2階に引きあげる滑車装置が普及し、代わって、避難する農業機械と自動車が、所狭しと高屋敷を占領するようになった。

(3) 水害史が生んだ周到な水防の構え

こうした頻発する洪水の恐怖に村人たちはどのように対応してきただろうか。

(a) 洪水時の対応

その一面を、西濃の民謡に関連づけて考察してみよう²¹⁾。

○すごい雨だぞ一本バイ（急報太鼓）だ、4とき8とき12とき

西濃地方では、「揖斐川上流の雨は8時間、長良川上流の雨は16時間、木曾川上流の雨は24時間で到達して、増水をもたらす」とされ、輪中水害の大切な特性を示している。したがって西濃が快晴でも、上流の山岳地方に大降雨があると、何時間も後れて、下流の西濃に大洪水が及ぶことがあるとするいましめ。また、「切れる」という言葉は水害時には堤防との連想から、タブーとされているが、ほんとうは、もっと大切なのは、「災害は忘れたころにやってくる」という言葉ではなからうか。

○高須・今尾のお城はしずむ、大垣さんは石垣だけだ

高須や今尾は、多芸輪中よりまだ海拔が低い高須輪中にあり、元禄のころ（1699～1701）の連続水害でお城が沈んだが、明治29年（1896）の大水害でも大垣城は石垣だけしか沈まなかった。海拔高度と水害の関連をこううたう。

○舟にこうせん梅干しのせて、水の見舞に水もって
 洪水時の非常食糧（救荒用）の大宗はこうせん（こがし）で、各家庭で麦類を炒って石臼で粉にひき、おひつに入れ、目張りをして貯蔵した。水害時にはこれを持って、他の輪中の親戚知人を舟で見舞った。

(b) 仕事や生活の知恵

同じように民謡を拾って見ると、

○水はへそぎり渡って田植、うよめ（水鳥）がくど（かまど）に巣くった。

輪中の排水は、まず堤外の川水が引かないと手が出せない。時には池沼に棲む水鳥が、かまどにもぐって営巣するほど湛水が長引く。

田植・除草・どべすき・畦つけ・溝掘りなど、多くの農作業が水づかりで行われ、それなりの重い道具とそれを使うコツが入用。湿田や堀潰れ（堀田に付属する湛水部分）には、ヒルの吸血軍団が活躍し農作業をひるませた。土地が湿めると時間もかかるし、身体も危い。根気がいる。すべてが重労働であった。

(c) 株井戸制の周辺

○嫁の在所と義絶になると、株井戸ゆえに是非がない

○昼は隠して夜水出して、下から庄屋へつめかけた

とうたわれ、地下水が米作に大きく関係した。同じ輪中でも、下郷には上郷からの悪水（廃水）が流れこみ稲田に冠水するので、上郷に井戸数の制限をした。上郷では井戸株券を持つ者だけに掘抜井戸の所有を許可した。これがいわゆる株井戸制で、まれには、規定の井戸数では旱魃が防ぎ切れず、隠し井戸も掘られた。それを下郷に発見されると大騒ぎになった。このような株井戸制も明治32年の三川改修から次第に影響をひそめたが、いままなお水に困り、水を恐れる輪中性が、多芸輪中にも、ソブ井戸の形で跡をとどめている。

○稗がゆ腹で田の草とって、やっと3年目に米俵

○今年や水屋へ白壁つけて、米の顔見て嫁もろた

2～3年目には必ずといえるほどに水害が見舞う。稲が全滅すると、生育の早い稗を栽培した。「米の顔を見る」という言葉が今の多芸輪中にもよく使われる。

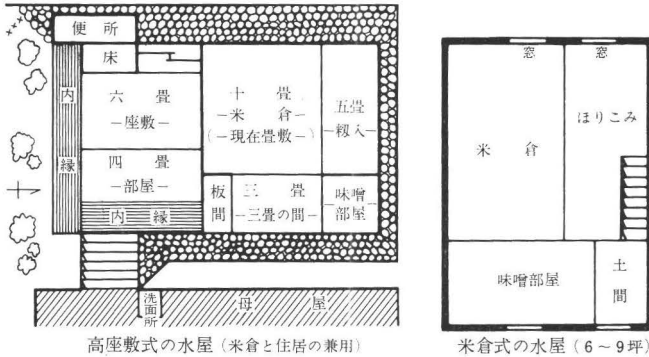
(d) 村づくりの周辺

① 集落

東大寺文書などによると、9世紀末葉から、この地に「輪中らしい仕組み」が成立し始めたようだが、文献に多芸輪中の名が現われるのは、延享元年(1744)の大樽（おおぐれ）川文書⁹⁾がその始めであろう。

ここでは、集落の多くは自然堤防上の微高地に立地し、後背湿地には水流の浸入に抵抗する除（よげ）を造って、村や稲田を保全した。いま各地に除内（よげうち）・除下（よげした）などの地名が残り、多芸輪中輪頂部の小堤にも、珍しく「あほよげ」

第2図 水屋の標準的間取



という呼称が残っている。

② 土地利用

村人は明治・大正のころまでは、米の一毛作で生活を支えた。だが、土地が低湿、ほとんどが湿田で耕作や農作業に過重な労働を強いた。土地・労働の生産性はきわめて低かった。じつに輪中の農民には、耕地の高度と排水の良否が、死活の問題となった。

人工による堀田がここに拡がったのも、古くは株井戸の制度が厳しく守られたのも、水に対応する生活の知恵から出た。また稲の品種選びに、耐水性を第一条件にされてきたことや、村中総出の川渡えが、年2回も今もって行われているのも、土地利用上の一つの知恵。

一面、麦類・そらまめ・なたねなどの裏作の導入が、高畝づくりや排水機の導入が大正期まで後れたのも、低湿地風土の制約からであった。今も、村づくりや土地の開発整備には、すべて排水溝づくりをトップにおく考え方を、村人たちは経験から身につけている。

③ 水屋と郷倉

輪中史のシンボルは水屋と郷倉(ごぐら)。多芸輪中にも、ことに水屋が低い下郷に目立つ。初期の水屋はその記述が「古今物語」にも現われる。一般に水から人命と財産を守る周到な構えをもつ。一際高く石垣を積み上げて基盤を高めた、洪水時用の避難住居と倉庫の兼用が多く、味噌・醤油・漬物などの置場を併設するものもある。

さらに、輪中堤には、約1~2kmごとに、公共用の郷倉を備え、杭・吹・蓆・縄などの応急資材や諸道具を収納する。

堤や水難を守る水神も各所に祀られている。

4. 開発を進めた人々

(1) 歴史を追って

輪中に表徴的な堤防の歴史は、古く奈良時代にさかのぼる¹⁰⁾が、工事には農民はもとより、貴族や寺院・武家などの力も大きくかかわった。

総じて、武家社会は、農民を土地に結びつけ、自力による治水と開発（自普請）を促したが、公儀普請（幕府の力で普請を行う）や国役普請（工事の一部を幕府がもち、国役の百姓人足をあてる）も、時に応じて実施された。

江戸時代に多芸輪中関係の普請を命ぜられた大名は、じつに六十余藩¹¹⁾に及んだ。なかでも薩摩藩には前後3回も工事を仰いだ。ことに1754~1755年の三川分流工事（宝暦治水）は、島津家の命がけの大規模な工事であった。さらに、明治になって進歩した西欧の治水工事を取り入れ、オランダの技師デレィケの設計によって、1887~1899年には近代的三川分流も一応完成を見た。低湿地をもつ多芸輪中の受けた恩恵は、ことに大きかった。

(2) 開かれた新田集落¹³⁾

多芸輪中でも、古来から水田は農民の最高の望みであった。農民は築堤や川筋の浚渫保全に、全力を傾け、知恵と経験を積み重ねた。

村人たちは無数の池沼を埋め立て、続々と新田を開発した。所領関係が複雑を極めていた今の多芸輪中地域では、水の综合利用上に幾多の困難に出合いながらも、よくそれを乗り切った。

江戸時代になって、著しく新田開発が進み、元禄のころまでに、つぎの経過¹²⁾で急速に水田を開き、そこに新田村を造った。

大場新田	1644~1648	鷲巣北畑新田	1673~1686
根古地新田	同 上	大跡新田	1688~1704
有尾新田	同 上	高柳古新田	同 上
小坪新田	1652~1655	石畑喜多新田	年代不詳
釜段新田	1655~1658	柏尾新田	同 上
大牧新田	1611~1673	横屋新田	同 上
高柳新田	同 上		

(3) 水のことは水に聞いて

もともと輪中は、水の入れものとして、水を外から入れて、また平穩に外に出す機能をもった。多芸輪中の主な水源となる牧田川は、微扇状地を流れるので、伏流水に転じ、川水だけでは堤内の必要量を充たせないこともあった。金草川や津屋川なども

旱天が多いと、水不足に陥った。その対策に一役買ったのが、天の恵みの地下水であった。

(a) 節水の定め¹⁴⁾

しかし、地盤高3～4mの北部の村々に、井戸を掘り過ぎると、その悪水が南部の村に溜るので、村々の間に井戸数の協約があった。たとえば下笠輪中では、つぎのように決められていた（株井戸制）。

- ① 掘抜井戸所有者には鑑札を付し、また井戸の現場には標木をおく。
- ② 新しく、みだりに井戸を掘らない。
- ③ もし隠し井戸が発見されれば、相当に処分され、またただちに埋めること。
- ④ 必要上どうしても井戸を掘りたいときは、定まった金額を払うこと。

(b) 工法の工夫

悪水排除の効率を高めるために、排水路を下流部に延長して、大川筋に放流する「江（え）下げ」や、他の用水路と交叉する所に、サイホン原理を応用して、その下をくぐらせる「伏越」（ふせこし）の工法を、古くから用いてきた。水に聞いた知恵であろう。

(4) 大跡新田の消滅¹⁵⁾

(a) 開発からの200年

多芸輪中が水と人との厳しい戦いの場であることを、如実に示した事例が大跡新田の消滅であった。もともと、大跡新田の開発が、大跡本村（1573～1591年ころ開発）より100年ほど遅れたのは、その地盤高が本村より30～50cm低く、鷲巣川の遊水地域にあたる水位の不安に基づくものであろう。

米作の魅力につられて、近隣から集まったわずか10軒以内の小村が、200年を水の苦難と戦った。明治中期、ついに大跡新田は消滅の運命をたどった。

ある夏の深い湛水を機に、養老扇状地にある近隣小倉村の一地主の厚意の救済を受け、ムラの水神「神明宮」を輪中堤上に残し、住居を小倉村に移した。村の跡地は、昭和30年代の土地改良で、立派な乾田となり、一部はもとの新田組の人々にも自作されている。皮肉にも、そのあと20年ほどで、多芸輪中末端に、岐阜県内のトップを切って、動力排水機が敷設され、あたりの農耕に新しい局面を開いた。開発と文明のかわりが痛く胸を打つ。

大跡新田と同じ遊水地域の東部に、自然堤防の微高地を占めていた八剣（やつるぎ）集落は、地盤高に大差がない小村ながら、今に存続しえたその歴史が、輪中の村の主要道（関ヶ原～今尾）沿いに立地する街村の強みを、物語るのではなからうか。

(5) 下池の干拓¹⁶⁾

(a) 遊水池——巨大な下池

多芸輪中の南部には、その土地基盤が海拔 0 m 以下の地域さえある。

そこには、明治初年ころまで下池（しもいけ）と呼ぶ周囲 6 km、広さ 200 ha にも及ぶ巨大な池があった。古くから遊水池として、あたりの洪水調節の役目を果たし、北部の下笠（しもがさ）・岩道（いわみち）・飯之木（はんのき）・有尾（ありお）・大場（おうば）新田・根古地（ねこじ）・釜段（かまだん）・高柳の小輪中などの悪水を引受けていた。

(b) 排水機農業のあけぼの

明治期には下池周辺の米作は、極端な低湿のため、生産性が低く、全身を水に沈めて敢行した、せっかくの田植も、少し雨の条件が狂うと、もはや秋の収穫にはつなげなかった。その重労働が、動力排水機導入の悲願を高めた。

明治 28 年(1895)、先覚者山田貞策の献身的努力により、高柳地区に、わが国では 2 番目の水連式蒸気機関による排水機の設置を見、低湿地農業に一大革新をもたらした。

(c) 岐阜県の干拓第 1 号

昭和初期には、この動力排水機の施設を活用して、「岐阜県の干拓第 1 号」¹⁸⁾として、下池の干拓が成功をおさめた。その先駆者平松は、明治 43 年（1910）に下池の買収、大正 14 年（1925）には干拓の認可申請にふみきった。工事は、池の囲りに排水溝を築き、そこを通して、池の水を 15 馬力のポンプで、堤外に押し流した。その跡に揖斐川から発動機船やサンドポンプで土砂を運び込んだ。大正 14 年には、第 1 期 14 ha、昭和 3 年には第 2 期 35 ha、昭和 5～8 年には第 3 期 160 ha を干拓し、湿田ながら広大な耕地を造成した。

(d) 水害復興から乾田化へ

昭和 34 年（1959）の伊勢湾台風では、下池地区は一面に深さ 5 m におよぶ泥深い湛水湖と化し、水没 4 ヶ月にわたった。その水害復興の中で、総合治水を見直し、排水機の増設、排水溝の整備、土地改良を敢行した。さらに昭和 39 年（1964）完成した上流部の横山防災ダムが、下流のここにも著しい成果をもたらした。いま、ここには干拓による治水・利水の成功を讃える記念碑と、下池の遺跡ともいえる 3 つの池が内陸 0 m 以下地域の「人と水との調和」を広く全日本に語りかけている。

(6) 現代の輪中開発

(a) 進む土地改良

以来、多芸輪中にも圃場や農道の整備、農地の集団化などが着々と成果をあげた。

面積で 4 分の 1 を、川と池沼が占めていた多芸輪中は、いまでは池と沼を完全に埋め立て、灌漑排水路に一大整備を加えた。さらに新設された西濃用水（1982 年通水）

第3図 多芸輪中関係動力排水機とその分布 (主として養老町史による)¹⁷⁾

番号	排水機名	排水面積 (ha)	設置年
1	色日川	316	昭29
2	祖父江	51	昭36
3	江月	73	大13
4	多芸	180	昭37
5	下高田	253.6	昭28
6	烏江	70	昭29
7	江橋	525	昭44
8	瑞穂	180	昭25
9	大巻	299	昭23 昭35
10	笠郷	880	大11 昭26
11	小平	40	昭21
12	釜駒	130	昭33
13	田13ヶ村	660	昭8 昭26
14	田6ヶ村	511	昭27 昭37
15	下池合同	84	昭35
16	下池第1	15	昭27
17	下池第2	15	昭27
18	下池東部	70	昭29
19	田下池東部		昭8



排水機名	排水面積 (ha)	設置年	摘要
小平	30	明39	蒸気機関
釜段・駒野	158	明42	〃
大巻・釜段	240	明44	〃
城山・戸田 (釜段地内)	70	大4	吸入ガス発動機
池辺村北部	285	大2	蒸気機関
笠郷村	357	大11	〃
江月・祖父江	100	大13	三相式交流誘導電動機

が、多芸輪中の輪頂部に、その末端を現わし、灌漑の近代化に急速な歩みを見せた。みごとな乾田化が明らかに文明の凱歌を歌いあげている。

(b) 道路網の整備

① 東西性農免道路の新設

多芸輪中は、地内に農免道路（農林漁業用揮発油税財源身替農道）を開通し、関ヶ原インターから国道258号線（大垣―桑名線）に連なり、名神と北陸を結ぶ機能をになった。そのため、いまそこに他府県、ことに北陸県ナンバーの産業車の動きが、よく人目を引く。

② 南北性基幹道路の開通

さらに、国道258号線の開通が、南北線を強化して、太平洋ベルト地帯に、この輪中を結びつけた。畏友朝田俊吉は、関ヶ原を日本のシルクロードの交叉地（東日本・西日本・表日本・裏日本の結び目）として位置づけたが、やがて多芸輪中のもつ南北性交通の意義が、中京圏の見直しを迫るかもしれない。

5. 輪中農業の年輪（輪頂部の大跡を中心に）

輪中農業の年輪には、「水と米と村」が関わり合って、独自の場をつくり、残酷な水害史と苦難の治水史が、低湿地農業の成長に多彩ないろどりを見せる。その一つが多芸輪中の年輪を、輪頂部大跡を中心に、明治以降について読んでみよう。

(1) 明治初期の農業

(a) 一毛作の湿田農業

明治初期には、村の囲りは一般に湿田が小さく（平均5aほど）区切られ、曲りくねる細い畦が、大小まちまちの魚鱗状の区画を連ねて、農民の労働生産性を低め、平均反収は5俵を割っていた。作柄が雨と風に動かされ、年によって作況と反収がづねに変動した。

稲苗は、洪水災害を見越して、少なくともその30%くらいを、予備として2～3ヵ月を苗代に残した。一畝15kgの土くれを、一畝一畝積み上げる重労働や、膚をつんざく伊吹風の寒さに見合うには、その収穫はあまりにも低かった。農民の生活は主食の米麦から味噌醬油まで、完全な自給体制で、換金作物がなかった。6～7人の家族労働で湿田農業を支えた。

1戸当りの栽培面積は、平均で水田1町歩（1ha）と、畑がその100分の1ぐらい。川藁・刈草・家庭の糞尿が大切な田畑の肥料に使われた。

多くを村の入会地としていた堤防が、役牛の飼料の大給源として役立った。

(b) 水の風土と土地利用

たとえば明治14年調製の大跡村略誌（岐阜県立図書館所蔵）によると、当時大跡は

石高918石，総反別102町歩，作物の筆頭はもちろん米。大麦・小麦・裸麦・大豆・きび・ひえ・そばなどのほか実綿も畑に栽培されて，衣料の自給を手織によった。

(2) 大正から昭和へ¹⁹⁾

(a) 送り出された糸姫たち²⁰⁾

換金作物の不足は，次第に若者を都会に，子女を女中奉公や糸姫に送り出すことになった。恐ろしいことに，糸姫の多くは2年ほどで結核に冒されて帰村し，ほとんどが若くして世を去った。たとえば大正末期の大跡には，約3分の1の農家が，若い結核患者をかかえていた。

(b) 換金作物への模索

土地利用の模索がクワやコウリヤナギ・レンゲソウと相次いで，湿田や畑に導入された。河川敷の自給畑作が各地に見られた。輪中の堤外地や畑地の桑を飼料に，住居の一部を充てて，大正期の養蚕を支えた。やがて多くの農家が，水田裏作にレンゲの採種を始めた。種子の価格の不安定さに足を引かれながらも，有力な商品農業として，多芸輪中に「レンゲの種取り」を挙げ，やがて岐阜県（本巢郡・養老郡など）を，全国的生産地の座につけた。

(c) 一毛作から二毛作へ

輪中費による新しい動力排水機の敷設が，着々と二毛作への歩みを早めた。裏作物に菜種やビール麦の栽培を加えた。もちろん米作の王座は決してゆるがなかった。換金の需要から村々に出売商人が増えた。

(d) 小作から自作へ

商品経済が農村に滲透するにつれて，村の地主層に所有田地を小作者に売り渡す傾向が目立ち出した。国の自作農創設制度が，年賦償還の借金制度を普及したので，多芸輪中の村々にも，自作農階層が固定化した。

しかし，風水害のたびに起こる掬米の減免の手順には，相変わらず検見（けんみ）を踏襲した。検見にも，自作者である第三者を仲介に立てたりして，激突を避けようとしながらも，小作料減免の話し合いでは，地主と小作が別々の火鉢をかかえた。封建制の名残りから，小作者は，はだして地主の玄関内の土間を，頭を垂れて歩いた。

小作者たちが共同取立所から検査済の合格掬米（おきてまい）を，地主の水屋式倉庫へかつぎ上げた苦労は，言葉に絶するものとして，今も村々に語りつがれている。

(e) 戦前から戦後へ²⁰⁾

① 村の戦時増産

たとえば大跡村南部の小輪中堤（俗称向う堤）は，農民の入会地として草刈場に利用され，1～3年ごとに抽せんで，利用部分を入れ替えていた。

戦時には，その堤の原（斜面）が大豆や甘藷の細長い段々畑に変わった。その下部

第2表 戦前・戦後の多芸輪中農業の動向（大跡村を中心に）²⁰⁾

	戦 前	戦 後	備 考
土地改良	農道づくり → 蛇行水路 → うるこ田 → あぜくさ道 →	区画整理 直線水路 グラフ田 舗装道路	伊勢湾台風の災害復旧を契機として推進
農業技術	牛 耕 → 後下がり田植 → 鋸鎌で稲刈 → 草刈鎌 → 田の草取り → リヤカー → 有機肥料 → 集団苗代 →	小型トラクター 田植機植え コンバイン 草刈機 農薬除草 小型トラック 化成肥料 分散苗圃	おもに、土地改良の成果と機械の普及による（省力化） （田植機普及）
経営方式	集約化 → 第一種兼業農業 → 自給養鶏 →	粗放化 第二種兼業農業 集団養鶏 ハウスいちご	多角指向から省力指向への地域展開 近郊区傾向の地域展開
総 合	専業農家 → 自給農家 → 多収穫指向 →	年休百姓 総合企業 近代化模索	都市化・工業化・近郊区・近代化の総合展開

の水路に手製の水田を急造した。当時農民の一番欲しかったものは、ヤミに流せる米。それを生産できるのは、「隠れ田」。隠れ田を開発する手頃の舞台が、この入会地の堤防下であった。そこに堤の裾を各地各様に削り、水路の堆積土を泥引きして、形の不揃いな隠れ田を造った。それが場所柄と耕作者の心臓の強さを反映して、まざまざとコンクールの実感を湧かせた。ゆきつくところ、堤防は決壊の危機にさらされた。

② 農地解放の断行

村々では、屢次の水害と自給経済崩壊の波をうけ、所有田地はお金以上のものとなれ、社会的信用の一大基盤となっていた。

その田地を、政府が公定価格で買い上げて、耕作者に売り渡したのが、農地解放であった。多芸輪中でも当時ヤミ価格が天井知らずに高騰するので、米なら2升(約3.6 l)、酒なら1升(約1.8 l)で、水田1反(10 a, 300坪)が、ローンで小作者の手に入るといった、至の横行が、むしろその実態に近かった。

第3表 休耕田の土地利用の現況（養老町大跡を中心に）²⁰⁾

取 組 み 方	問題点（経験の記録）昭和50年代
サトイモ栽培	出荷に人手がかかり過ぎ、家族本位では取組みにくい。
クワイ栽培	何年も小球が残って芽を出すので、稲田に戻しにくい。
イチゴ栽培	少なくとも2年くらいの経験がないと、技術面で無理である。別に苗を育てるために畑がある（これだけが今も裏作として残り、地域性に合うらしい）。
コイ養殖	畦を破ってザリガニが入りこみ、小鯉を食べつくすこともある。
完全休耕	雑草の退治に年2～3回は除草剤の撒布が入用。地味がひどくやせる。ヒエは農薬で取りつくすことはできない。3年も休耕を続けると、その上3年間の時間と除草費をかけないと、耕作できる状態には戻せない。一番困らせたのはヒエであった。
飼料栽培	いねや草を飼料用に、水田で育てる。適期を見定めて、青草のまま刈取り、養牛農家に売り渡す。

しかし、この農地解放は、やがて小作農民の勤労意欲を高め、世の中を変えた。めぐりめぐって第2表のような農業の時代的対比を生み出すことにつながった。一面、旧地主にとっては、それが没落の現代史を歩む機縁となった。村人の都市への転進も目立った。

③ 掘抜井戸の近代化

たとえば上郷の大跡地区では、戦後の土地改良で、地下水の農業利用を画的に見直した。明治・大正期には、下郷に影響するので、上水用にさえ、強い制限をうけたのが、現在は地下の自噴帯から農業用水として、16本の公用掘抜井戸が、適時適所に栓を開いて、その近くをうるおす仕組みで、水稻灌漑やイチゴのハウス栽培に活用されている。水田一筆ごとに、野井戸を私設するケースも少なくない。

いま、多芸輪中の村では、家庭用水には公共水道のほかに、掘抜井戸を各戸に持って、井戸船を備え、住居内に水の流れを絶やさない。公共の近代的動力排水機の機能に負うことを忘れかけている。文明の力はじつに大きい。

④ 集団養鶏からハウスいちごに

昭和34年の伊勢湾台風による大災害が、この輪中に復興の目玉として、集団養鶏を取り入れさせた。農協を軸とする採卵鶏の多数羽飼育が始まったが、外国産食餌の輸入に頼る経営の弱さから、一進一退した。5～6年後れて、広く輪頂部にも、イチゴのハウス栽培が広がった。イチゴと両立させることを主眼に、農協を集荷機関として取り組んだ。

⑤ 都市化，工業化の芽生え

たとえば，輪頂部大跡集落は，戦後の水害復興過程で，「半農半工」の形で創業した，藁工品工業・縫製工業・電機住設工業・電気機械工業・織物下請工業・自動車整備工業・土建請負業・プラスチック工業・自動車解体工業，「半農半商」の住宅サッシ商業・石油販売業・ドライブイン商業・食料品販売業・飲食店などが，模索的ながら，巨大な数歩を進めた。工業化の火つけ役は，前述の農免道路の開通であった。

⑥ 困りぬいた休耕田

わが国では，米作技術の進歩と米食姿勢の減退で，1970年代後半から，米が余り出した。農村経済は，増産→供出→ヤミ米→主流通へと移行した。ついに，国の米作減反政策で，休耕田の割り当てが，輪中農村大跡（海拔高度およそ3 m。耕作面積1戸平均1.2 ha）にも届いた。1反（10 a）につき3万円ほどの補償をするから，転作か休耕をせよというのである。水田オンリーの輪中風土に，米の交替作物を見つけることは，始めからできない相談に近かった。

やがて，村々には，純然たる専業農家がなくなり，農民は水田にしげる雑草に勝てる自信を失い始めた。

6. 展望と課題

(1) 輪中風土への対応

(a) その位置から

多芸輪中が日本の人口重心に近いという位置性を見直す日は近かろう。

人口重心の位置を占めるからには，おのずからそこに遠近の人が去来し，あるいはそこに住みつく。産業が栄え，文化が定着する。

そのとき，先住者が集まる人々に「郷に入りては郷に従え」と言い放つだけでは，輪中の未来は必ずしも明るくはならない。

日進月歩の精華が輪中にみなぎっていないと，後住者の心をとらえない。住民の伝統には，自ら限界があることもまた自明の理である。

都市化を軸とする全住民の学びの必要が，まずその辺から始まる。輪中地帯は，日本の平野のうちでも，もっとも地理的な臭いのする頑固な社会だとする声が気にかかる。すべての人が水に命をあずけているからである。

当然そこには，時代や空間に対して，適応性・合理性を失うほどの住民の頑固さは，「地域に差し込む光さえも遮る結果になりかねないから」とする現地風土に学ぶ姿勢がいる。

(b) その地勢から

多芸輪中は複合輪中で，土地が広く，かなりの傾斜もあるから，おのずから，地域風土が細分化され，人と土地，人と水とが結びつく様相が場所ごとに違うことにな

る。だから人々の心に保守性を刻みこむ。ともすると、微扇状地の川筋には、宿命的に、天井川への移行が待ち受けていることや、輪中が沖積土壌の入れもの(地盤軟弱)であることさえ、ふと忘れるかもしれない。

(c) その気候から

多芸輪中のおかれているのは、北緯35度の気候環境。北米ならロスアンゼルス、南米ならブエノスアイレス、オーストラリアならシドニーに近く、さまざまな土地利用の可能性を思わせる。ことに多雨の沖積土壌に育つ草のみずみずしさにその感が深い。土と水と光の価値が、欧米とは格段に違うのではなかろうか。ここにも学びの課題はつきない。

すでに同じ養老山麓の高須輪中は、このような特性をもつ光と熱を、よく施設園芸に活かして、岐阜トマト・岐阜イチゴの声価を全国の市場に高めた。多芸輪中でも、未来をひらく試行錯誤が、たとえばよくイネの耐水性を高めたし、園芸作物の促成・抑制を技術として、住民が身につけた。

(2) 近郊性への対応

ゴッドマンがいうように、メガロポリスの成長が、世界史的な必然の勢とするならば、農業一途の地域思考では、もはや多芸輪中は世界文明に置き去りにされるかもしれない。

これからは、地域にたてられる第2次・第3次産業との共存姿勢が、問われることは自明の理である。2～3の視点をあげて見よう。

① 輪中風土

(もちろん多芸輪中も) その日常生活上に、防水の面ばかりではなく、防湿の面からの建て直しも入用であろう。

② 水と根性

(輪中)との取り組みは、これからも、経済の面でも、文化の面でも、水量より水質の問題として、関係を深く探る必要に迫られよう。水は一面住民の命の根源でもあるが、他面では「根性」の根源でもある。だからこそ、「もっと大切に」、「もっときれいに」、「もっと科学的に」と、きめ細かな対策が必要となろう。不用意に川面に流すゴミが下流でおかす罪悪の限りなさを、輪中の人々は知りつくしている。だが、ふと忘れていることも多い。

そのうちに「人も魚も困るから」と、子供作品の標語が、川ばたに立つことになるかもしれない。

③ 道と橋

さらに、時の歩みの中で、橋と道と自動車の近代化、地域化を、輪中地域にどう適応させるかにも、大きな問題が残されよう。その場合、日本の交通開発に大役を果た

す多芸輪中を、大きく方向づけると、その東西性よりは南北性交通の意義に、より大きく関心をもつ必要があろう。

④ 海との結び

いくら航空が発達しても、島国が海から脱却できるはずはなからう。

⑤ 根付く心

とにかくも、多芸輪中の住民として、ふるさとに報ゆる道は、自らが仕事を通じて、風土の中でねばり強く、学びぬくところから、始まるに違いない。

速くにありて、なおふるさとに根付く心がよくしあわせの糧とならう。

【参考文献】

つぎの著書や論文・資料などから多大の啓発をうけた。一部引用させてもらったところあり。記して著者各位に深く感謝する。

- 1)～6) 西脇健治郎「多芸輪中における新田集落の成立と消滅」, 歴史地理学会会報95号
- 7), 8) 西脇健治郎「輪中風土のなかの水利」(Ⅰ～Ⅲ), 水利科学121号
- 9) 養老町「養老町史通史編」(上), 建設省地理調査所資料
- 10)～14) 養老町「養老町史通史編」
- 12)～14) 岐阜地理学会「岐阜県地理地名事典」地人書院
- 15), 16) 西脇健治郎「多芸輪中における新田集落の成立と消滅」, 歴史地理学会会報95号
- 17), 18) 養老町「養老町史通史編」, 養老町郷土誌編纂委員会「ひらけゆく養老」, 岐阜地理学会「岐阜県地理地名辞典」, 角川「日本地名大辞典 岐阜県」
- 19) 岐阜県「総合開発計画, あすの岐阜県」(企画部)
- 20) 大垣女子短大「多芸輪中——もう1つの年輪」紀要(1977)
- 21) 桜井一郎「岐阜大学教育学部研究誌」(ふぞくの歩み)

(大垣女子短大名誉教授)